

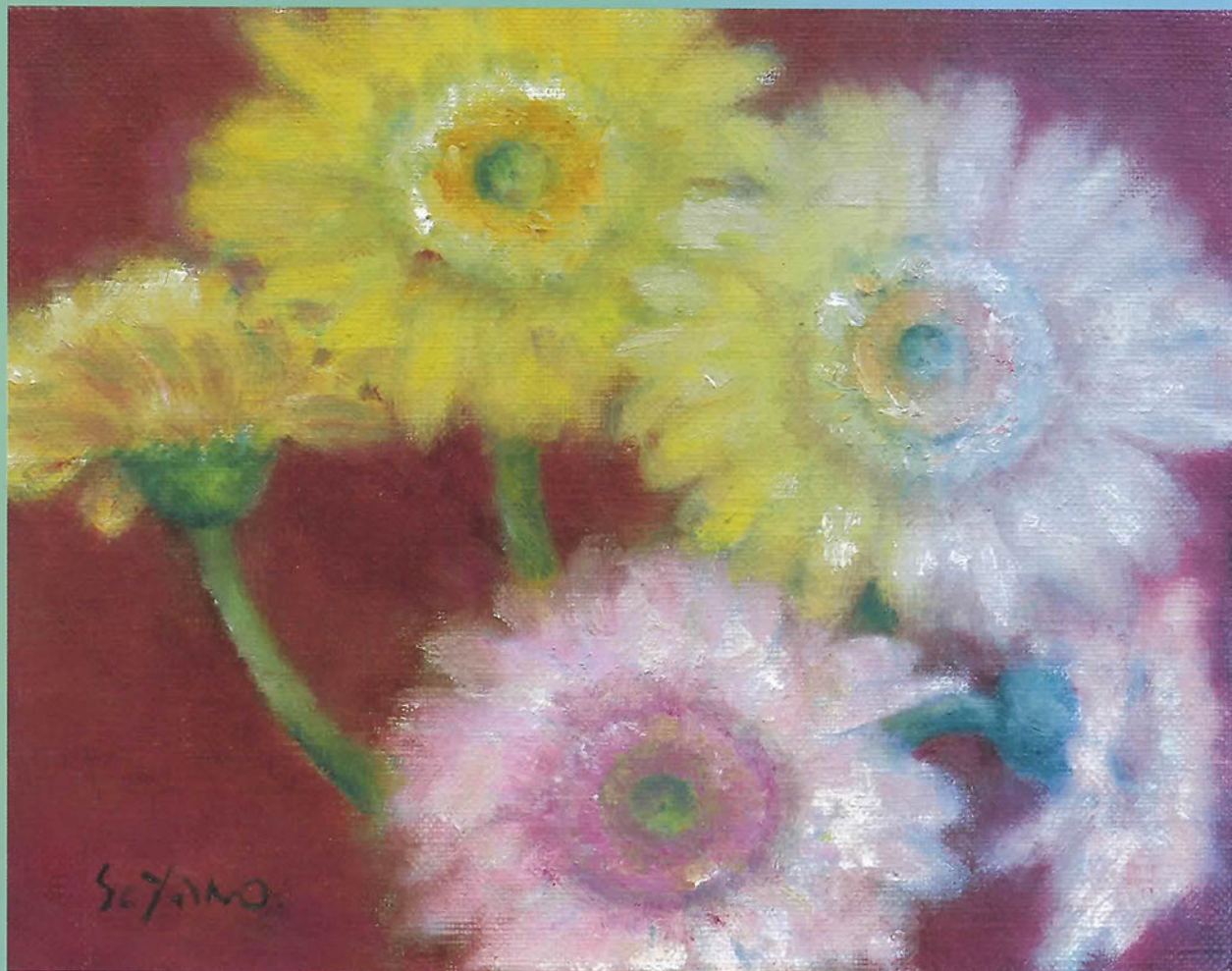
2011 12 あけぼの

クリスマス——「闇を照らす光」の降誕

特集
対談
東日本大震災を経て迎えるクリスマス新谷のり子×菊地 功
闇の中で見いだす“光”葉 祥明 闇から光へ？弘田鎮枝
福島から星を仰ぐ今泉ヒナ子

“ことばの杜”への小道 Part II / 思い、考えを語り、相手の話を聞き、愛し、愛され、奉仕する体験を深めていくノートルダム学院小学校で お相手・シスター田中範子 / 山根基世
ミステリアスな日々 / 幼児の〈信〉木崎さと子
活憲とヒューマンライツ (人権) / 身体も社会も破壊する原発伊藤千尋
光と風のおくりもの / 来ない理由三浦暁子
キリストの足跡 / 無原罪の聖マリア百瀬文晃

連載





田中範子

たなか・のりこ

ノートルダム教育修道女会会員。ノートルダム学院小学校校長



山根基世

やまね・もとよ

NHK退職後たちあげた、有限責任事業組合「ことばの杜」代表。著書「ことばで「私」を育てる」「ことば」ほどおいしいものはない」ほか。



ことばの杜への小道

Part II

最終回

思い、考えを語り、相手の話を聞き、愛し、愛され、奉仕する体験を深めていくノートルダム学院小学校で

「よく祈り、よく学び、持つている力をよく使って社会に奉仕」

山根 子どもたちの言葉をどのように育てていくか、一年間、学校の現場に出かけて、しめくりにカトリック学校を訪問させていただきました。ここでは国語にも力を入れてらして、五年ほど前から特別授業を始められています。どういふことから特別国語を始められたのですか？

田中 どちらかと言えば「話す」ということが重視されているところ、日本語の美しさを味わい、文体のリズムを体感させる必要性を感じましたので、「特別講義の国語」という時間を特設しました。担当は小・中・高の国語の教師として優れた実践をされて既に退職されたシスターではあります。講師としてお願いしております。斎藤孝氏の理論とテキスト「理想の教科書」を取り入れて、最高レベルの日本語に数多く出会う機会を与えることがねらいのようです。過日の職員研究会では私たち教師も声楽の専門のシスターから、日本語をはっきりと美しく発音する方法を学びました。各学年の特国の時間には絵本の読み聞かせもありますし、実際に子どもたちが名作を手にして音読や朗読もしています。普段の国語とはまた異なる切り込みは子どもたちにとっては新鮮なようです。国際化時代で英語が重視されている今の時代だからこそ、日本語の持つ意味を知る必要があると思えました。

山根 このような時代にわざわざ特国という時間を設けられたのは、言葉に対する思い入れが相当お強いことなのでしょうね。ずいぶん前から

古典を子どもたちに親しませたいと。

田中 そうですね。今から六年前に特設しました。発音や発声のためのテキストには「詩」を朗読し、朗読のためには「漢詩」や竹取物語のような「文語文」を用いています。小学校時代に意味が分からなくても覚えた格言や諺などは、頭の中に残っていきます。人は持つているものしか出せないのですから、小さいときに五感を通してしっかりと体にしみこませることが大切なのではないでしょうか。気に入ったところは声に出して読んでみるとか、繰り返し暗誦してみるといいこと言葉を意識するようになります。

私が担任をしていたころには宮澤賢治・与謝野晶子・八木重吉などの詩を徹底的に覚えさせたものです。目で見ると、耳で聞く、手で触れるなど体で感じるという体験をさせることが私たちの仕事だと思っています。本校の子どもたちの何人かは毎年お正月の八坂神社での百人一首カルタ大会に出ています。

小学校は、中学・高校そして社会人になっていく土台を創る大事な六年間だと思っています。学校はどんな環境を子どもたちのために整えるのか、その責任を神様から問われていますよね。

山根 特に、朗読とか声に出す、声の力みたいなものも感じてらっしゃるみたいですね。今日の授業をいろいろ見せていただきましたけれども、高学年になるとほんとうにしっかりとした声の出し方で、明確に話していましたね。

田中 四・五年生では読み仮名と註をつけて編集された「真読破シリーズ」を使っているようです。学校では今、言葉の訓練のほかに、スピーチを

通して自分の思いや考えを正確に相手に伝える訓練をしています。それは相手の述べること、相手がお話うとして聞くことを聞く姿勢につながります。それがコミュニケーションだと思います。特に話す力、聞き取る力をしっかりと身につけることで、社会に出てから、他者の理解につながり、また自分の持つているものを人に伝えることで役立つような仕事や、結果としてできる人間に育てたいですね。

山根 カトリックの学校ということで、公立の学校や他の私立学校と違う教育方針がありますでしょうか？

田中 卒業の前に、六年間聖書を使って学んだ中で一番心に残る言葉を選び、筆で色紙に書かれます。そしてなぜその言葉を選んだのか理由を色紙の裏に書きます。そうすることで言葉に対して責任を持つとらえ方ができるように思います。卒業週間には百六十人分全部を廊下に飾ります。

山根 学校の教育方針としては基本的にはどんなことを。

田中 キリスト教的な価値観を持って生きていくことができるような取り組みをすることですね。「よく祈り、よく学び、持つている力をよく使って社会に奉仕しよう」と。

山根 自分の持つている力を社会に役立てるようにならざる……。

田中 よく祈りというのは内的な価値観を育てることですね。自分は神様から望まれてこの命をいただいている大切な存在であること。そして自分と同じように周りのお友達も人に愛され、愛するのために生まれてきたことが分かる。自分を人も

大切に、周りのものと自然すべてに敬意をもつて向き合う、いろいろなものを丁寧に扱い、尊ぶ。そういう心を子どもたちに教えるようにしています。

子どもなのでなおさら本物が限りなく本物に近い体験をさせることが、内的なものを子どもの中に育てていくと思います。例えば美術のカリキュラムの中に、自分の心を表現できるような体験が一年生からプログラムに組み込まれています。社会に奉仕するためには、ある程度の基礎的な学力は備わっていないければなりません、積極的に人の役に立たなくてもそこにいるだけで他者の喜びになるような存在になつてほしいのです。

子どもたちは躍動的な存在ですが、自分が持っているものを十分発揮できるためには、言葉という媒体、コミュニケーションルールを使って他者と関わる、他者に奉仕する、その意味でも言葉の訓練は大切だと思います。実際に手を合わせて祈ることも大切になっていますが、行動に表していくために自分が何ができるか、祈りを行動で表していくことも大切ですね。

山根 もう一つの教育方針の中に、よく考えて

田中 そうですね。本校では「徳と知」の教育を具体的には「豊かな心」と「基礎的な学力」を身につけることで実践しています。「考える力」の前に「感じる心」を持ちたいものです。ものを見て、聞いて、触れて、心を動かされることが一番大事だと思っています。人の悲しみ、喜び、苦しみで自分の心が動かされる。そこから思いやりが出てくるのではないのでしょうか。感じる心を育て

るために、年間の行事や四季折々の体験学習を折り込んでいきます。それで感じた心を、どのように処理し、行動に表すのか、じっくりと考え、判断し、正しいことを実行できますように、と祈るのです。基礎教科を通して判断力を身につける。その意味で国語、算数など基本的な教科を大事にしなければなりません。

沈黙と言葉

山根 子どもが、自分で考えて自分の言葉で語れる人間になるように育つことが、よりよい世の中をつくる、と考えているのですが、先生は子どもたちの考える力はどこから大事だとお考えになりますか。

田中 ノートルダムの教育モットーは、「徳と知」です。徳の部分はどちらかというと感じる心につながり、知の部分は考えを生み出す、創り出すことにつながっていくと思います。ですから日常的にいつも何かをしている、動いている状態ではなく、じっとしていることも大切なのです。過日六年生は修養会というのを山の家でいたしました。ここからバスで四十分ぐらいのところに



ありますが、六年生百六十人はだれ一人おしゃべりをせずに、完全沈黙で山の家に行つたのです。教室を出るときから目的地に着くまで、そしてお昼のおにぎり弁当の間も、黙っていたきました。午前と午後の神父様の講話を聞いて、自分の日常生活を振り返るのです。いつも元氣いっぱいの子がひとことも話さず、山の斜面や草むらやそれぞれ思い思いの場所を見つけて座ったり、大空を眺めたりしながら内省のひとときを持ちました。

山根 その沈黙をさせるのは、なにか特別な…。

田中 自分を内部を深く見つめる、集中する、

潜心するためです。そのためには饑舌は禁物です。入学してから何度も来たこの「山の家」はきつといつもとは大いに異なつて見えたのではないのでしょうか。風のそよぎ、小川のせせらぎ、木の葉のすれるかすかな音、小鳥のさえずり、いつもは聞こえない音を彼らは聞き取つたのです。きつと神さまの小さな声も聞こえたのではないかと思ひます。沈黙することで得られる宝物に出会うのです。

山根 言葉を育てるといふと、どう発信するかに関心が向かいがちですが、沈黙も大切なのですね。

田中 人間を超えた何か偉大なものへの憧れ、思い、新しい発見などがあつたことでしょう。後でいくつかのグループに分かれて、心に沸いたこと、感じたことを話し合い、聴き合います。それはほとんど祈りに通じるものでした。

山根 宗教性とか信仰を考へる上で、言葉というのとはどういう意味を持ちますか。

田中 言葉で人を生かすことができますし、言

葉で人を傷つけ、殺すほどの大きな被害をもたらす場合があります。子どもたちは人を喜ばせるのにどんな言葉があるか、逆に、人を傷つけるのにどんな言葉かと考え、発表し合います。美しい言葉を使う訓練をします。とつさの場合に、どんな言葉が出てくるのか、それはとても大きなことです。子どもたちは、人は心にあることを口は語る」と聖書に書かれていることを知っています。いつも相手が必要としている言葉がとつさの場合に出せるような心を持ちましょう、と言っています。

山根 口は心にあふれるものを語るものですね。そのためには、いづどんな場合でも人を傷つける言葉を口走らない自分をつくるということが大切でしょうね。

田中 そうですね。うっかりそういう言葉が口から出てしまつたり、耳にしたりすることがあつても、自分の弱さに対して詫言の気持ちを素直に出し、互いに赦し合いたいものです。傷ついたほうも憎んでしまつたのではなく相手を赦す。宗教性が根底になければ、とても赦すというようなことはできないでしょうが……。私たちは言葉を多く使い過ぎていふように思ひます。

山根 反省ですね。しゃべりすぎているところもありますよね。

学校ではいろいろユニークな取り組みをなさつていますが、毎朝のテレビ放送。これは子どもたち自身が自分たちの手で放送全部を創つていふと。放送部員は五、六年生ですか。

田中 はい。五、六年生の委員会活動の中でしております。放送委員会の仕事の一つです。



山根 カメラから放送機器全般を。

田中 はい。1カメラ、2カメラ、キャスターも毎日決まっています、全部子どもたちがします。調節したり……も。

山根 (笑い) すこいですね。

田中 私も感心しています。キャスターも将来、何人かはほんもののアナウンサーになるのではないのでしょうか。

山根 皆なりたがるのではないですか。

田中 憧れだと思えます。低学年の子どもは高学年のお兄さんお姉さんを憧れています。

山根 今日番組を見せていただきましたけれども、先生方が宗教放送を?

田中 はい。毎週木曜日が教師の宗教放送になっています。全教師が年に何回か当たります。ノートルダムの大事にしている精神・霊性を具体的な先生の体験や思いをまじえて話されます。音楽や映像を美に上手に使ってなさいますので、感心・感動の木曜日です。ノートルダムの特色を先生方皆で作りに出そうということになりました。

山根 先生の在職三十年を経て、変わってきましたか、この学校の雰囲気とか環境とか。

田中 ここに参りましたときは、ほとんど五十

年前でしたから、テレビも白黒で、コンピュータもなく、手で書いて、時間をかけてコミュニケーションが行われていた時代でした。が、今は世界のすべてのことがリアルタイムで分かっってしまう。このような情報化の時代に子どもたちに最初に教えるべきではないか、これは何か、小学校の一年生から六年生までそれぞれの学年に一番体験させなければいけないのは何か、ということ、以前よりもっと真剣に考えて与えていかなければならないと思っています。あまりにも情報が氾濫していて、子どもたちはそれを取捨選択する能力がまだ備わっていません。限られた六年間という大切な体験をする時期に、昔のように直接的に自然と触れあっている時間が減りましたね。ですからなおさら体験を重視しています。昔と今と比べて、人として温かく交わることを大切にしなければいけない時代かなと思っています。

山根 先生が一番大事だと思いにすることはどんなことですか。

田中 他者のためにどのくらい自分の大事な時間や物を与えることができるか、どのくらい他者を優先できるか、ということではないでしょうか。自分さえよければいいとか、自分が有名中学に入るためには他者を省みないとか、そういうことになってきますと、どうしても自分の世界がすべてになりやすいです。それも大事ですが、他者も同じように自分を磨かなければならないと思っているわけですから、自分が損をしても他者の幸せにつながるのであれば、という願いを持てるよう子どもになってほしいと思います。

山根 そういう心を養う上でも、言葉も養って

いくことは役立つでしょうか。

田中 六年生は三月十五日に卒業しましたが、三月十一日に大きな災害が起きましたね。卒業式前日に児童会の六年生の子どもたちが校長室にまわって、ぼくたちは明日卒業していくけれども、児童会として何かやりたい、これから募金箱を作るので、明日の卒業式に正門に立つてもいいですか? と。これはすばらしい証です。そういう言葉を発することができる六年生として卒業していったことを誇りにしています。卒業式の朝ギリギリまで児童会役員が募金箱を持って正門に立つと他の仲間も手伝う。正門に卒業する六年生が作りたての箱を幾つも持つてずらりと並び、来てくださる来賓や保護者の方々に頭を下げて募金活動をしているのを見たときに、ああこんなふうにも他者のために、やらせてくださいと言っている子どもに育ってくれたのか、と感動しました。卒業式の間、涙をこらえるのに大変でした。その後、低学年も刺激を受けましたね。小さい子どもたちも真似をして各教室で募金活動がはまりました。そういうことはとてもうれしいことですね。

山根 学校の伝統、先輩から後輩、お母様を支えたりもするいい絆があるんですね。

田中 はい。ありがたいです。これからもそのような学校でありたいです。こんなに私は愛されている、こんなに人間関係があったんだ、ということに気づいて、感謝してそれぞれの人生を生き、そして終えることができますように、と願っています。ですから子どもたちに、一番美しい言葉は「ありがとう」という言葉じゃないかしらね、と言っています。